巻頭言

家庭科での保育教育の充実を

牧野カツコ

　子どもたちをめぐるさまざまな問題や事件が起こるたびに、家族のあり方や家庭での子どもの発達が話題となります。家庭教育や幼児期の教育についての論議において、学校での「家庭科」と結びつけられることが少ないのは残念です。家庭科というと、いまだに料理、裁縫などという古めかしい言葉を思い出す人もあり、衣食住に関することだけが家庭科と思っている人がいるのも残念でなりません。

　中学校、高等学校の家庭科は、現在は完全に男女共学で、しかも保育の学習はしっかりと位置づけられているのです。中学校「技術・家庭」科では、「自分自身の発達と家族」「幼児の発達と家族・家庭」、高等学校の家庭科では、「人の一生と家族・家庭」「保育・福祉、高齢者」などの学習があって、保育に関して学ぶようになっています。

なぜ保育は家庭科の中心か

　家庭科の中心に保育の学習が置かれるべきであると、私自身は長いこと主張してきました。ではなぜ保育が家庭科の中心なのでしょうか。家庭科とは何か、を改めて考えてみてください。家庭科は「家庭」について学ぶ教科です。家庭とは、家政学などの学問では「〈家族〉の人びとの〈生活〉の場」であるとされ

ています。〈家族〉は、おそらく人類の発生とともに存在していたと考えられており、その本質的な機能は、人間の生命が誕生する場であるということができます。いずれの社会も、次世代の生命の誕生とその保護と養育のために、家族という集団をもっています。誕生した生命が、誰かの保護を受けながら衣食住を消費して生き続けることが〈生活〉の営みです。

　文明の発展とともに衣食住の生産などの仕事は家族の外に移行し、家族機能の減少をもたらしてきました。家族に最後まで残る本質的機能が、人間の生命の誕生といえます。家庭科は、家庭について学ぶ教科ですから、その中心に、人間のいのちや生命・発達などの保育の学習が置かれるべきことは、当然でしょう。衣食住はあくまで、人間が生きるために必要なものですから、被服や食物の生産技術だけを学べばよいというわけではありません。

日本の家族と子どもたちの人とかかわる力の弱まり

　戦後、一貫して日本の家族は小規模化してきています。家族の中に生まれた子どもは、非常に限られた人の中で成長しています。

　多くのきょうだいや祖父母、いとこなどに囲まれて育っていた時代には、けんかや協力、自己主張や我慢をして、人とかかわる力を自然に育てていました。今日、乳幼児期の子どもは、言葉を発しなくとも察してくれる親との関係だけがほとんどとなりました。母親との間では平穏で良い関係であっても、いろいろな人びととかかわる力が弱くなってしまっているのです。これは母親のしつけや家庭教育の問題ではなく、家族の構造の変化か

らくる問題です。子どもは意図的な教育によってだけ成長するのではなく、家庭環境そのものからさまざまな学習をしていきます。

今日、〈もの〉は豊かになりましたが、子どもが育つ環境の〈ひと〉は大変貧しくなっていることを、大人は自覚しなければなりません。子どもたちの人とかかわる力や社会性、コミュニケーション能力が劣っていることは、乳幼児期に、異なる年齢や性、多様な人びとと接する経験が非常に少なくなっていることと無関係ではありません。

また今日では、雇用者家族が大幅に増加しています。多くの子どもたちは家で親の職業を見ることも手伝うこともなくなりました。家庭はもっぱら消費の場となっていますので、子どもは手足を動かして仕事をするという体験をほとんどしないで育ちます。何かを作るという体験が少なく、人と協力して仕事を成し遂げたり、人の世話をしたりなどという経験が乏しいのです。

日本では、親類や他人の子どもの世話を経験することが全くないまま親になる人が多いのです。幼い子どもを見たこともなければ、遊んだこともないまま、出産し、わが子の世話をする状況になることに、大きな不安を感じる若者は少なくありません。

欧米社会では、多くの子どもたちは男女とも、青少年期にベビーシッターを経験します。ベビーシッターという責任ある仕事を通して、子どもを知り、世話をする経験をしながら、約束や問題に対する課題解決能力など、大人になるために必要な能力を身につけています。

中学生・高校生に必要な保育の学習

多くの研究者が、子どもと接する経験に

よって、「子どもはかわいい」と思う意識が育つことを明らかにしています。子どもと接する機会が著しく少ない中学生や高校生にとって、家庭科で乳幼児と触れ合う機会をもつことは特に必要になっています。幼稚園や保育所、児童館、子育てサロンなどで乳幼児と接する経験をする学習が家庭科で行われています。きょうだいが少ない幼児たちにとっても、中学生や高校生のお兄さんお姉さんと遊ぶ経験は〈ひと〉とのかかわりを広げる貴重なものです。

育児休業中の先生と赤ちゃんを家庭科の教室に招待する授業をしている先生もいます。赤ちゃんをこの目で見て、そっと手を握ったりした生徒は「自分にもこんな時期があったのか」と感動します。赤ちゃんに接することで、人びとは優しい表情をもらいます。何か月か後に、もう一度同じ赤ちゃんを招待すると、生徒は人間の発達の素晴らしさを目の当たりにして、再び驚き感動したりします。

乳幼児との触れ合いは、人の生命の素晴らしさ、大切さを実感することができる貴重な体験です。何百もの言葉で教師が人間の発達を説明するよりも、乳幼児が無言の教育をしてくれるでしょう。

青少年たちが犯す残酷な事件を耳にするたびに、犯人となった青少年が、もしも家庭科の授業で保育をしっかり学び、人間の乳幼児と接する経験をしていたならば、このような事件は起こらなかったのではないか、とまで私は考えてしまいます。

それにつけても、家庭科の授業時間数自体がどんどん削減されています。保育の実践を取り入れるほどの時間数がないのは大変残念です。

（お茶の水女子大学名誉教授）